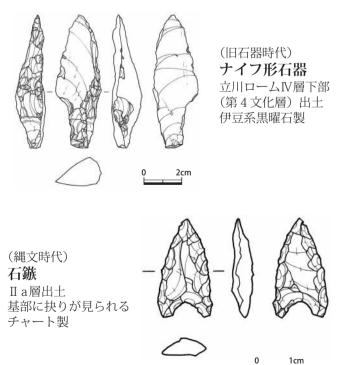
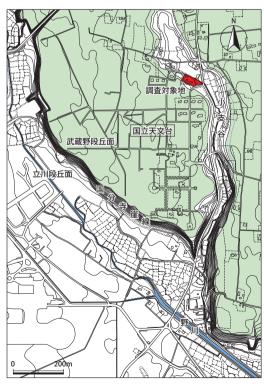
東京都三鷹市大沢

天文台構内遺跡IV



写真右手が北西方向





はじめに

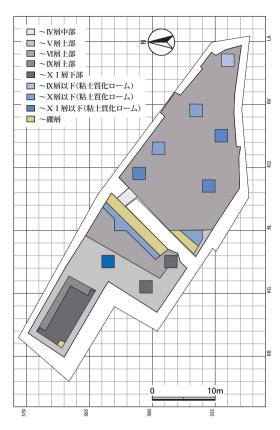
天文台構内遺跡は野川左岸の武蔵野段丘面に連なる遺跡のひとつで、約315,800㎡に展開しています。これまでの発掘調査において旧石器時代、縄文時代、古墳時代~奈良・平安時代及び近世の遺構・遺物が発見されており、時代の幅の広い複合遺跡として捉えられています。

遺跡は舌状台地の先端部にあり、かつては周囲の崖線直下などに湧水地点が多くあったものと思われます。 各時代の遺跡が発見されることで、太古より水に恵まれた高環境の地であったことが裏付けされます。

今回の発掘調査は、東京大学武蔵野寮跡地の整地工事に伴うもので、940㎡を対象に平成15年7月から11月まで本発掘調査を行いました。今回も旧石器時代〜近世に至る様々な遺構・遺物が発見されました。ここでは発掘調査の概略などを各時代毎に紹介します。

旧石器時代

調査区の全域において、地表から4m程の深さまでローム層を掘って、旧石器時代の調査を実施しました。その結果、立川ローム層(関東ローム層の最上層)のⅢ層~Ⅵ層上部で石器・剥片などの遺物や、礫群などの遺構が発見されました。これを層位的に区分し、5枚の文化層(上から順に第1~5文化層)として捉えました。各文化層では、石器の出土範囲や原料石材、接合結果などによるまとまりを抽出し、石器集中部としました。



旧石器時代調査深度図



礫群 SR-39 (第3文化層)

第1文化層(Ⅲ層上部)では、石器集中部1基と礫群2基が検出されました。本遺跡では、Ⅲ層で礫群が検出されたのは初めてです。また、底面に焼土が分布する浅い凹地が検出され「焼土跡」と呼称しましたが、性格は不明です。

第2文化層(Ⅲ層下部~Ⅳ層上部)では、石器集中部4基と礫群2基が検出されました。各石器集中部で出土したナイフ形石器を見ると、幅広のもの、薄手で縦長のものなどの特徴的なものがまとまっています。また、石器石材である黒曜石の産地は、信州系、伊豆系が混在しています。

第3文化層(IV層中部)では、石器集中部5基、礫群4基が検出されました。礫群は規模の大きいもので、うちSR-39は構成礫数が1,161点に及びます。石器集中部も規模の大きいものがあり、いくつかは礫群と重複する位置関係にあります。黒曜石は、伊豆系のものが多く見られます。

第4文化層(IV層下部~V層上部)は最も石器が多く出土した文化層で、石器集中部8基と礫群14基が検出されました。第3文化層に比べて各々礫群の規模は小さくなり、礫群の数が増大しています。石器集中部も礫群と同様に数が増しています。また、チャート製の角錐状石器1点の出土が注目されます。黒曜石は第3文化層より更に伊豆系のものが多くなりますが、その中で石器集中部4jは信州産のものだけがまとまっています。

第5文化層(V層下部~VI層上部)では石器集中部 1基が検出され、礫群は発見されていません。石器の 石材は黒曜石とホルンフェルスが主体で、黒曜石は全 点が信州系のものです。



石器集中部3j(第3文化層)



石器集中部5b(第5文化層)



第4文化層の石器

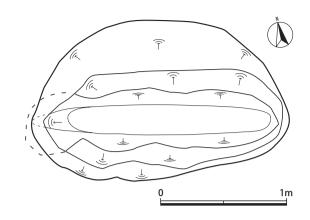
縄文時代の調査

縄文時代草創期の土器片3点が、遺物包含層(I層)から出土しました。爪形の文様が施文されていて、爪形文土器と呼ばれるものです。草創期の土器は、隣接する都道拡張工事の発掘調査でも押圧縄文土器が出土していますが、爪形文土器は押圧縄文土器と同じ頃若しくは更に古い時代の土器と考えられています。同時代の遺構の発見には至りませんでしたが、野川流域全体の遺跡においても、極めて希少な資料といえます。

このほかの縄文土器は、ほとんどが縄文時代中期前半のものです。阿玉台式土器と呼ばれるもので、東関東を中心に多く見られる土器です。扇状の把手や胎土に金雲母が混ぜられることなどが主な特徴ですが、今回出土したものには、特徴的な把手や金雲母の混入は見られませんでした。また、石器は磨石が最も多く、ほかに石鏃、敲石、石皿、打製石斧などが出土しています。

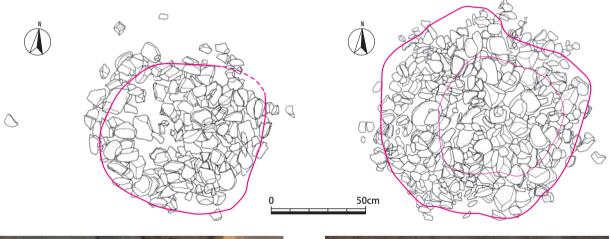
集石土坑が40㎡程の範囲内に4基まとまって検出されました。4基はともに浅い土坑を有し、焼礫200~500点を伴っています。4基の礫には接合関係が見られ、集石土坑間で礫の移動があったことが確認できました。このうち1基では土坑に充填された土の中に炭化物が発見され、放射性炭素年代測定によって9,500年前との結果を得ました。この年代は縄文時代早期にあたります。

ほかには陥し穴1基が検出されています。平面が楕円形で底面が狭くなる構造です。遺物を伴わないことから明確に縄文時代の遺構と判断できませんが、形態的には縄文時代に見られるものです。



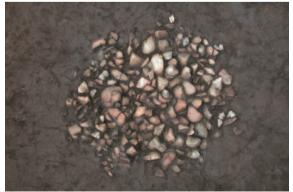


陥し穴 SK-1





集石土坑 SS-27



集石土坑 SS-28



調査区全景(手前は旧石器時代の調査中、奥は縄文時代の遺構確認面)



爪形文土器(縄文時代草創期)



縄文時代の石器(石鏃・スタンプ形石器・礫器・石皿・磨石)



縄文時代の土器 (中期前半:阿玉台式土器)



溝状遺構 SD-1・4・5



溝状遺構検出状況



溝状遺構(中央寄りがSD-2)

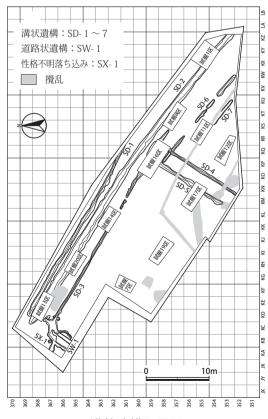
近世の調査

今回の調査地の近くには、かつて長久寺という真言宗の寺がありました。この寺は天文年間(1532~54)に存在していましたが兵火により大破し、慶長3(1598)年に再建されたと伝えられています。大正13(1924)年の天文台開設に伴い、300m程北に移転しましたが、寺に残る資料によって旧境内の地割がある程度分かっています。これによれば、調査地は旧寺の敷地の一部に含まれています。

旧寺の敷地北側の境界線は緩いカーブを描いていて、現在の境界線(調査地の北側の境界線)とほぼ一致するものと思われます。この境界線に沿った方向に数条の溝状遺構が検出され、地割に関わる施設跡と考えられます。

そのうちの溝状遺構SD-2は、境界線から3m程内側で境界線に沿ってカーブする、幅1m、深さ20cm程の断面逆台形の浅い溝です。市内では、地割に沿って「根切り溝」と呼ばれる断面V字形の溝が掘られる例が多く発見されていますが、SD-2の形状はこれとは異なっています。SD-2では18世紀末頃の陶・磁器が出土していることから、溝の構築年代もその頃と考えられます。また、SD-2に直交する断続的な溝状遺構も発見されています。

そのほかに、道路の跡と思われる遺構や、その傍らには焼土を含んだ土が充填された性格不明の落ち込みなども発見されています。これら遺構が寺との関わりを持つものなのか、今後の課題となりました。



溝状遺構配置図

周辺の地形と遺跡の立地

三鷹市は武蔵野台地のほぼ中央にあって、浸食谷が多く発達した台地東側と、平坦地が広がる台地西側の中間的な位置にあります。

市内南西部の大沢地区には古多摩川の一支流である 野川が流れていて、その左岸には10数mの比高を持つ国分寺崖線があり、上位の武蔵野段丘面と下位の立 川段丘面を界しています。

天文台構内遺跡は武蔵野段丘面の南端部に位置していて、南西側を国分寺崖線、東側を小支谷に界された舌状台地の先端部に展開しています。小支谷は遺跡の北方を水源地として発達した浸食谷で、野川流域では最大級のものです。かつては国分寺崖線や小支谷の直下に、多くの湧水地点があったと思われ、小支谷には昭和の中頃まで水車や山葵田が見られました。

まとめ

天文台構内遺跡は時代の幅の広い複合遺跡で、今回 の発掘調査では以下の3時代に大きな成果がありました。

旧石器時代:立川ロームⅢ層からⅥ層上部までに、5枚の文化層を確認しました。礫群は、第3文化層では大規模が、第4文化層では小規模で多数が見られました。第5文化層では黒曜石の産地が信州系に限られています。

縄文時代:草創期の爪形文土器をはじめ、早期、中期前半の土器や、磨石を多く含む石器が出土したほか、 集石土坑や陥し穴などが検出されました。

近世: 溝状遺構が多く検出され、大正初期まであった長久寺の地割に関わるものが含まれると考えられます。



中央土層ベルトの断面



調査区西端 (A1区) の深堀調査



遺跡全体を北東上空から見る



調査風景



性格不明落ち込み SX-1 (焼土の検出状況)



集石土坑 SS-25 (縄文時代)



焼土跡 SFX-1 (プラン確認状況)



Ⅳ層中部での礫群検出状況



礫群 SR-39 (礫の集中部)



旧石器時代調査終了

天文台構内遺跡をはじめ、三鷹市の遺跡 については三鷹市遺跡調査会のホームページ「みたか遺跡展示室」で詳しく見ること ができます。

http://www.mitaka-iseki.jp

また、お問い合わせはこちらです。 E-mail office@mitaka-iseki.jp Tel 0422-48-9454 Fax 0422-71-0434